気のごとくさまざまな解釈が成り立って，よけいに理解に苦しむことになる．日本側で自分達より理解の深そうな人にそれとなく話をもちかけては，どうやらこんなことらしいとか，この人でも結局わかってないんだなあとうなずきあう夜もあった．

Informal なパーティとしては，初日の前夜に立席の歓談会，最終日の前夜に米国側主催の夕食会があった．最初の歓談会ではとにかく名薄に載っている人全員に自分の名礼を見せつけては握手してもらって悦に入るというミーハーであったが，最後の夕食会では学問のことから生活面のことまで Janglish を駆使して語り合うことができた．語り合いと言えば，日本側同士でも夜を徹して語り合う機会を得たことも一つの大きな収獲であったと思っている．

考えてみれば，中層大気力学という学問分野そのものも小規模な研究者間の相互作用の蓄積があってこそ前に進むのである．その意味で欧米には，学位を取った者が年令の長少を問わず first name で呼び合う（何もこれが良いというわけではないが）ことにも象徴されるような，忌憚ない discussion の蓄積があるように見うけられた．ミーハーの見た中層大気力学はまさに相互作用のまっただ中であった．ペーペーにもかかわらず参加できたこの機会を決してカバン持ち的成果に終わらせたくはない．将来の中層大気力学を作るための「糧」とするよう精進したい．

原田　朗 著

大気の汚染と気候の変化
―人間社会と気候の関係―
気象学のプロムナード 11

東京堂出版，1982年10月刊，
A 5 判，223 頁，3,200 円

どんどん読める本である．宣伝文にあるように，本シリーズが，専門書や教科書とは異なり，「コーヒーでも飲みながら，楽しく読んで頂くための副読本」として，「気象業務に携わる人達」ばかりでなく広く一般の人々にも気楽に読め，なおかつ「最新の成果を正しく理解することができる」ということで企画されており，本書もその期待に充分答えている．著者がまえがきの中で述べているように，本書は「大気の汚染」という比較的ローカルな話題と「気候の変化」という汎地球的な年代記的な話題を扱っている．この一見遠い話題が密接な関係にあり，人間社会にとって大変重要な問題であることが，本書を通読することにより理解されよう．

本書の構成は大きく２つに分かれ，第１章は大気成分について，第２，３章は都市の温暖化とそれに関連した問題，例えば風系の変化などの例を，第４，５章は，都市化，工業化が降水現象に及ぼす影響といった小規模スケールの現象を扱い，第６章では，大気汚染という短期・局地的現象と気候という長期・汎地球的現象の接点としての長距離輸送の問題を，第７章ではバックグランド汚染，第８章では汎地球的汚染と気候という大規模な現象を扱っている．内容は具体的で，例えば，製紙工場の風下での降雪現象や，最近のセントヘレンズ火山の噴煙の影響の観測などが紹介されている．今までの気象学の成果が，大型計算機を用いたシミュレーションにより確認されつつある一方で，実は身近な気象現象の中に興味ある事実が含まれていることが，本書から気づくであろう．それらは，まだ議論の余地のある解決されていない事柄が多く，今後の調査研究を待たなければならない．

書き方は，本シリーズの主旨にそって，数式はほとんど無く，図の多い記述的な内容となっている．しかし，教科書的な平凡な記述ではなく，著者の関心のある事柄を中心に現在の当面する課題を要領よくまとめており，読者を飽きさせない．その一方でふれられない話題もあり，物足りなく思う読者もいるとは思うが，それはそれで他書で補えば良い．本書は，総花的な教科書ではなく，著者の研究の方向の現れた著作なのだから．それはともかくとして，本書は，気象に関心のある人，特に大気汚染や気候変動などに興味を持つ人にとって，概要を知るための絶好の入門書であろう．そして，気象と人間社会との係わりあいが天気予報だけではない事を，あらためて認識して欲しい．各章で述べられた事柄をさらに詳しく知りたい読者のために，巻末に総合報告を中心とした参考文献が紹介されており，次の段階の研究（？）において役に立つであろう．

最後に，このように誰にでも割と気楽に，通勤電車の中やベッドの中で読める本は，装丁をペーパーバックにして，価格も安く，手軽に入手し，持ち運べるようにした方が良かったのではないかと思われる．

（林　正康）